

Human Rights Watch

東京ディレクター

土井 香苗 氏

—ヒューマンライツウォッチ（以下 HRW）の活動について簡単に教えてください。

HRW の活動は、調査とアドボカシー（政策提言 / ロビイング）のふたつに分けられます。特に HRW は調査で有名な団体です。HRW はおよそ世界 90 カ国で、紛争で民間人の被害がどの程度でているのか、どんな武器が使用されたのか、難民の発生状況、拉致、拷問といった人権侵害が起きているのかといったことを調査しています。調査するだけでは問題を解決することはできないので、アドボカシーも積極的に行っていて、大国の政府や、国連といった力のある機関の政策を変えようと努力しています。

—国際協力のお仕事に興味を持ったきっかけは何ですか。

高校時代に犬養道子さんの『人間の大地』という本を読んだことが一番のきっかけです。これはアフリカやアジアの難民キャンプでの犬養さんの体験を書いた本で、読んだときに大きな衝撃を受けました。

それと高校 1 年生のときにイギリスにホームステイした際に、

相部屋だった子がユーゴスラヴィア人だったのですが、そのホームステイの直後に彼女の母国が戦争になって、彼女が両親と離れてアメリカに疎開しに行かなければならなくなってしまったんです。その経験も驚きでした。ニュースの中では、戦争について見たり聞いたりすることはあるけれども、自分の知り合いや友人が実際に被害に遭うというのはなかなかない経験ですからね。普段テレビ越しに伝わってくる戦争とかそういう非日常的なことを実際に友人が体験すると、こうした問題も近くに感じるようになります。

—国際協力の仕事に就くために、学生時代にしていたことはありますか。

英語は勉強していました。よく勉強していたというか好きでしたね。もうひとつは大学 4 年生の時にエリトリアというアフリカの国に一年間ボランティアをしに行きました。本を読むだけでなく、やはり現場に行ってみるというのは大事なので、いい経験だったと今でも思います。それと大学 3 年生の時にピースボートでボランティアもしました。そのときのネットワークは今でも生きていると思います。いずれにせよピースボートに乗ったり、エリトリアに行ったり、そうしたことをすることによって色々な人に会うじゃないですか。それはすごく意味があったことではないかと思いますね。

—国際協力の仕事に就いてみて感じる、仕事の厳しさはなんですか。

エリトリアの法律を作るという仕事をしたときは国際協力の難しさを感じました。エリトリアの国を助けることで、エリトリアの人を助けたいと思っていたのだけれども、やはり国を助けることで人を助けられるというのは甘い考えというのを思い知らされたんですね。本来国は弱い人を守るべきであるのにも関わらず、2001 年に独裁国家となったことがきっかけで、エリトリアはそういう人たちを虐待する方向に進んでしまいました。それは非常に大きなショックでした。非常にいい政府であれば権力の側を助けることで、一般の市民を助けられるのかもしれませんが、必ずしもそのような政府ばかりではありません。国際協力といっても色々な支援の仕方があるので、この活動は本当に市民のためになるのかをしっかりと考えたほうがいいというふうに思っています。

それと、気をつけたほうがいいこととしては、国際 NGO や国際機関は競争率が非常に高く、狭き門だということです。戦略的にキャリアパスを考えていかないといけないと到底入ることはできません。

—ではこうした高倍率の選考を突破するためには、土井さんは何が必要だと思いますか。

最低限英語は必要です。それも日本語と同じように、自由自在に使えるければなりません。それにプラスして、国際協力というのは専門職なので、何をやりたいのかまづきちんとして、その分野で基本的に自分は世界一だと言えるくらいまでに上り詰



▶profile

東京大学法学部卒。東京大学在学中の 1996 年に、当時の史上最年少で司法試験に合格。大学 4 年時にアフリカ東部のエリトリアという国で、同国法務省調査員を務め、刑法に関するリサーチ業務に携わる。卒業後、2000 年に弁護士登録。弁護士時代は、アフガニスタン難民弁護団などで活躍。2009 年に HRW 東京オフィスが開設されると、東京ディレクターに就任。

めるよう努力しなければなりません。それにしつこさと情熱を持ち続けること。あとは、その世界でとにかく活躍して、名前を業界の人に覚えてもらうことですね。

—これまで弁護士としていちばん印象に残っている仕事はなんですか。

アフガニスタン難民の弁護団で活躍したことがいちばん印象に残っていますね。タリバン政権に迫害されて日本に逃れてきた難民申請者が東京入管に強制収容された事件でした。結局最後は、日本から強制送還されてしまった人が多く、つらいことも多かったのですが、一方でこれがきっかけになって随分と日本の世論も変わりましたし、メディアの注目度や法律の制度も変わったので、それは良かったのではないかと思います。

—これからの目標を教えてください。

人権を守るために、日本の政府の力を活用しようとしています。紛争が起きたからといって私が100円を募金したからって何も変わるわけではない。大きな人権侵害を止めるのは力の強い政府などしかできないことなのです。日本の政府というのは世界的に見てもかなり力の強い政府なので、日本の政府がそのもてる力を人権問題解決のために使うように仕向けることが私の仕事だと思っています。だから私の夢は日本の政府が、世界的に見て人権保護のリーダーだと言われるような国にするということです。

—人権侵害を引き起こしているが、日本にとって経済的に良いパートナーにならなければいけない国家への対応は難しいと思うが、この点についてどのようにお考えですか。

人権侵害をしている国との仲を悪くしてくださいと言っている訳ではないです。経済的に密接な関係を持ちつつ、人権侵害をなくすようにと主張していくことは可能だと思うんですよ。例えば、友人を例に考えてみてください。もしとても仲の良い友人が悪いことをしていて、その友人と今後も長く付き合っていきたいと思ったら、そうしたことはやめるべきだときちんと言うじゃないですか。それが本当に長く続く関係だと思っています。



▲ HRWの東京オフィス開設に際してのプレスカンファレンスに出席する土井氏 (写真提供: Human Rights Watch)

ある就業日の タイムスケジュール



- 8:00 起床・出社
- 9:45 メールチェック
- 10:45 その日のHRWのプレスリリースをVET
- 12:00 オフィスでメディアの取材
- 14:00 ランチ
- 15:30 外務省・議員やNGOの人とミーティング
- 16:30 ブログ作成
- 17:00 オフィスでメールや書類作成
- 19:00 『朝日ニュースター』入り、
メイクと打ち合わせ
- 20:00 『ニュースの真相』生放送
- 21:00
- 21:30 夕食会に参加
- 24:30 帰宅
- 26:00 就寝

—国際協力の仕事をを目指す学生にメッセージをお願いします。

内向きにならないでほしいです。これから日本は人口も減っていくし、日本は物量で勝負する国ではなく、今後はアイデアで勝負をするソフトパワーの国になるべきだと思っています。外向きになって、外からいいアイデアを持ってくることはもちろん、中からいいアイデアを外に発信していくことが日本の国力になります。それと、海外に長期間滞在するというのは社会人になったら難しいですし、学生だから無謀なこともできると思うので、どんどん海外に出たほうがいいと思います。まさに外向きになれということですね。 edit: 泉田洋平



▲ 明治大学にて講演を行う土井氏 (写真提供: Human Rights Watch)